

坊主山墓地遺跡

— 坊主山墓地出土遺物の調査報告 —



1989年10月

太子町教育委員会

例 言

1. 本書は、坊主山墓地出土遺物の調査報告書である。
2. 調査は、太子町教育委員会社会教育課三村修次・田村三千夫が行なった。調査後の整理作業については、岩村千穂の協力を得た。
3. 本書の執筆は三村が行ない、編集は三村・田村が担当した。

目 次

1. 調査に至る経過	-----	1
2. 検出状況	-----	1
3. 出土遺物	-----	2
4. まとめ	-----	3

挿図目次

第1図	雙棺出土地点位置図	-----	表紙
第2図	遺物出土実測図	-----	1
第3図	遺物実測図	-----	3
第4図	鳩荘絵図	-----	3

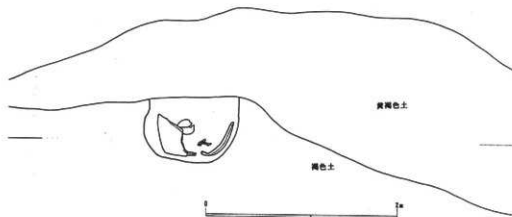
1. 調査に至る経過

太子町の北西部、龍野市と境を二分するかたちで坊主山がある。坊主山は『鵜莊絵図』に「数山」と記載され、1神社・3寺院が所在していた。この山の東・南の斜面には多くの墓が乱立し、太子町鶴、助久、平方、龍野市福田、舍利田の共同墓地となっている。近年、この墓地を改葬したり拡張工事によって甕棺が出土している。今回は、拡張工事中に発見されたもので、出土した地点は太子町佐用岡字佐用岡山に所在する。

甕棺は、坊主山の山頂から南東方向に傾斜する斜面に開かれた数多くの墓地の中に位置している。この地区は鶴地区の墓地に当たり、明治期には「北山」と小字名が記されている。昭和62年 6月 8日、現在の墓地を拡張するために、斜面を切っ立て状に掘削中に検出された。

2. 検出状況

甕棺は、表土から70mの地点で甕棺の底部と甕棺の内部から小壺を見ることができ人骨が散乱していた。掘り方は黄褐色の地山を切り込むで、径46cm、深さ35cmの墓壇が掘られている。盛土は茶褐色粘質土で厚さ40cmを測り、やや低いマウンドを持つと思われる。



第2図 甕棺遺構断面実測図 (1:40)

3. 出土遺物

甕棺の内部からは、人骨の外に備前焼の小壺と土師質小皿2点、須恵器小片3点、河原石が検出された。

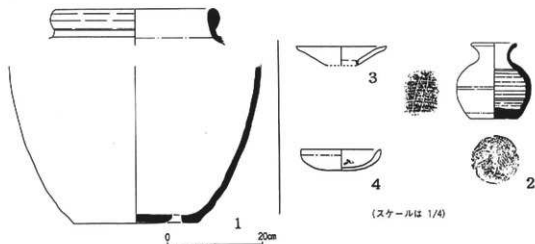
甕棺(1)は、備前焼の甕で口縁部の一部と肩部の破壊が著しい。底部に穿孔した跡があり、甕棺に転用したと考えられ、推定高約60cm、口縁部径33.6cm、底部径26.4cmを測る。口縁部玉縁外部に2条のゆるやかな凹線をもつ、備前焼の編年でIV期にみられる特徴をもつ甕である。

壺(2)は、備前焼の小壺で、口径4.8cm、器高8cm、底部径5cmを測る。胴部中央が張り窯印があり自然釉がみられ、胴部内面はヘラ削りで、朱が全体に付着している。底部は回転糸切り調整している。胎土は精製され断面灰白色を呈し、焼成は堅緻である。色調は淡褐色を贈呈する。甕の内部より出土した。

土師質小皿(3)は、口径9.8cmでロクロ引出し成形で、色調は乳褐色を呈し、胎土は良質である。器壁は比較的薄く、口縁端部は外反し水平方向へのびる。

土師質小皿(4)は、口径8.4cm、高さ2.2cmを測り。器形には凹凸が多く、口縁部がやや内湾しつつたががり、丸くおさまる。

このほかに、須恵器片3点検出さしたが、いずれも摩耗が著しく上層から流れ込んだものと推測することができる。

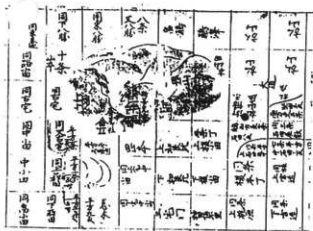


第25図 坊主山墓地出土遺物

4. まとめ

鎌倉時代後期の『鵜荘絵図』によれば「新善光寺」「孝恩寺」等が所在しており、出土した甕及び副葬品の小壺は、室町時代末期の時期と推定され、また、墓地の一角に五輪塔の残欠があことから、鵜荘内の墓地として考えられる。

今後、墓地の改葬工事等によって遺構・遺物の検出が増えることが予想される。また、中世の墓地の解明につながるものと思われる。



第4図 法隆寺領播磨国鵜荘絵図

(兵庫県史付図より)



写真1. 坊主山墓地全景



写真2. 甕棺検出状況



写真3 出土遺物写真

